

生の短さについて

セネカ著 大西英文訳 岩波書店

われわれのうける生が短いのではなく、生を蕩尽する・それが真相なのだ。莫大な王家の財といえども悪しき主人の手に渡ればたちまち霧散霧消してしまい、どれほどつましい財と云えども善き管財人の手に託されれば使い方次第で増える様に我々の生も、それを整然ととのえる者には大きく広がるものである。多くの者は他人の幸運へのやっかみか、自己の不運への嘆きで生を終始する。思い出してみられるとよい、いつあなたがしっかりした計画を持ったことがあったか、一日があなたの意図したとおりに進捗した日が何日あったか、いつ、あなたがあなた自身を自由に使うことが出来たか、これほど長い生涯にあなたがなした働きとは何であったか、50歳や60歳と云う年齢になるまで健全な計画を先延ばしにし、その齢になってやっと生き始めようと思うとは！死すべき身であることを失念した何と愚かな忘れやすさであろう。

何かに忙殺される人間には何事も立派に遂行できない、という事実は誰しも認めるところなのである、雄弁しかり、自由人にふさわしい諸学芸もしかり、諸々のことに関心を奪われ散漫になった精神は何事も深く心の深くには受け入れない、生きる事の知恵ほど難しいものはない、あれほど多くの偉人たちが富や公務や快樂を拒絶し、全ての障害を排除して生きる術を知るといふ、ただその一事の為にのみ全生涯をかけた、どれほど短かろうと自由になる時間を自分の為にのみ使うからこそ彼等の生は誰の生よりも長いのである彼らの生の寸刻たりとも人間的陶冶に費やされず・実に費やされぬ時間はなく寸刻たりとも他人の支配に委ねられる時間はなかった、彼等には生の長さは十分な長さであった。一日一日をあたかもそれが最後の日であるかのように管理する者には、明日を待ち望むこともなく明日を恐れる事もない。

生きることにとって最大の障害は、明日という時に依存し、今日という時を無にする期待である。過去の日々はどの日でも念じれば眼前に到来し、思うがまゝに、覗き見ることも、止める事も可能である。

全ての人間の中で唯一叡智（哲学）の為に時間を使う人だけが閑雅の人であり“真に”生きている人なのである、彼は又、あらゆる時代を自分の生涯に付け加えもする、全て彼の生の付加物となる。

神聖な思想の様々な学派の命々赫々とした創始者たちは我々の為に生まれ、我々の為に生を用意してくれたと考えなければならない。

美しきこと極まりない知の世界に導かれている、今という短くして移ろう時の流れから離れて過去という悠久にして永遠であり、より善き人々と共有する時へと全霊を傾けて身を委ねずして何としよう。 (完)